永劫回帰と瞬間 ・「ツアラツストラかく語りき」の思想をめぐって・

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>平井 邦男</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大手前女子大学論集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1985-11-20</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>URL <a href="http://id.nii.ac.jp/1160/00001291/">http://id.nii.ac.jp/1160/00001291/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Creative Commons: 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja
当世風に言うならば、いま何故ニーチェなるのか？
と問うことも出来るだろう。一世紀以上前のニーチェの著作が、いまなお、
何故読み返さ

平井邦男

永劫回帰と瞬間

－「ツァラッストラ伝説」語りき－の思想をめぐって
血と警句をもって書く人は、読まれないので、暗記されることを欲する。
恐らく、ニーチェの読者は、彼の文章の中にニーチェの切実な体験をかぎ取るのであろう。彼の語る一語一語が、血でって層かされていることを感じてのだろう。

ニーチェ自身は次のように言っている。

「血をもって書くものだけを愛する。血をもって書け。そうすれば、血が精神であることを知るだろう。」

ニーチェはこの「ツァラッツトラ」のっている《どかな調子》に注意をながしていている。

ニーチェはこの「ツァラッツトラ」のっている《どかな調子》に注意をながしていている。

ニーチェはこの「ツァラッツトラ」のっている《どかな調子》に注意をながしていている。
ここでは、『ラ・ラ・ラ・ラ』の語りきりについて考察する。

この曲の構成は、曲の形式がシンプルであるため、語りきりは非常に重要である。曲の構成がシンプルであるため、語りきりは非常に重要である。

特に、この曲の構成がシンプルであるため、語りきりは非常に重要である。

この曲の構成がシンプルであるため、語りきりは非常に重要である。

この曲の構成がシンプルであるため、語りきりは非常に重要である。
ところで、ニーチェは、この「ラクダ」から語りきりに表現されているような後期思想を、最初から持っていたわけではない。ここに示されている考えに到達するには、彼は、人生の最大の危機を乗り越えなければならなかった。順風満帆で進んで来た青年時代の終わりに、彼は、ハーレ大学の教授職を辞職し、独りあてのない漂泊の旅に出る。そこで彼は、それまで抱いていた観念に徹底的な批判を加えるのである。そうして、彼は生まれ変わるのである。

ニーチェの生涯は、如何にして人を本来の自己になり得るか、ということの実例を示しているだろう。彼の一生は、次第に本来の自己に目覚めていく過程を示している。

ラクダの時代とは、黒々として、従順に与えられた重荷を背負う状態である。誰でも、最初は既存の文化を学習して身につけることから始める。ニーチェは、のようにして、リッチェル教授の下で、文壇学者となった。二十四才でハーレ大学の教授であった。正に、順風満帆の出だしであった。彼の初期思想は、シュッペンハーバー哲学と、ヴァーグナー哲学とは密接に結びついていた。実際、処女作『悲劇の誕生』は、ヴァーグナーに捧げられており、第二の著書『反時代の考察』には、教育者としてのシュッペンハーバーと、「イロイドにおけるヒルデルト・ヴァーグナー」の二論文が含まれている。彼の青年時代は、この二人に捧げられたといっても過言ではない。これが、ニーチェの所謂「ラクダ」の時期である。
しかし、このラクダは、突然、ジーンに変身する。ジーンの時代は、自己否定の時代、反抗の時だろう。この間に、彼は、それまで身につけた

べてのものに徹底的な批判を加え、呪詛し、点検し、自己にあわないものをぶっ切り捨て、自己本来の姿に気付くのである。

幻滅は突然やって来た。一九七六年八月、パイロイト視覚劇場の第一回の公演の始まる時であった。彼は突然の痛風感と吐き気気に襲われたの

である。それは、こういう状態であった。

まるで夢でも見ているような気持だった。まるで、どこにわたったかはいらないのか？ 何ひとつ見覚えがなかった。

がなかかった。わたしはむなしく思い出すページをこすった。トリー・ブッシュはるかな幸福者の島、まるで似通う影もない。骸骨を置き

たころのあの比類のない日々、その共に振った小人形のしきりとした仲間。彼等には、繊細な物事にふれる指をとさに注文するまでも

なかったのだ。いまはそれにまるで似通う影もない。何事が起こったのか？

その場にいたまれなくなったキャラは、一人視覚劇場を離れ、ボーニャの森の奥深くに逃げる。ここで、彼は、彼を取りまっていた、あ

りとあらゆるものに対しても、吐き気を感じ、世界を、人々を、また自己自身を呪うのである。そして、彼は、はじめて自己を狭め

る気持がわたしを襲った。いまこそわたし自身に立ち帰って思いをひきめなければならないぎりの時だと見とったのだ。

彼は、ここで、生命の危険とも言える、ひどい病気になるのである。

また、まもなく一夏遅かった時には影然だったが、その年の冬、わが生涯のおもとも暗い冬をナウブルクでおくった時は、影だけになっ

てしまった。これがわたしの最小限だった。

「モーリッセ」で一夏遅かった時には影然だったが、その年の冬、わが生涯のおもとも暗い冬をナウブルクでおくった時は、影だけになっ

彼は、ここで、生命の危険とも言える、ひどい病気になるのである。

この病気、孤独の時に、彼は、いままで身につけていた観念のうちで、自分にあわないものをそれをふるい落していったのである。これ

が、「モーリッセ」の所谓「ジーン」の時代である。一九七六年八月、パイロイト視覚劇場の第一回の公演の始まる時であった。彼は突然の痛風感と吐き気に襲われたの

—— 37 ——
そこで、一体どういった自己認知がなされたのか？ニーチェにとって、病気の状態とは、何であったのか？恐らく、それは、人間の卑小さに対する報復、自己の運命に対する呪い、世界に対する怒り、それらが入り混じった何とも言えない嫌悪感であったからだ。

そして、彼は、最も辛いことも言わなければならない。即ち、いままで抱いていた観念のすべてを疑い、呪いし、批判することである。これまで最も愛を築かれたのではなかったのである。

これに対して、その敵を愛するばかりでなく、その友をも憎まなければならない。

この言葉の中に、ニーチェのどれほどの無念がこめられていることか！彼は、断腸の思いで、自分の最も愛のものを見捨てる。自分の青春を葬るのに、お互いに嘘をつきながら、呪いを呪う。

まるで、お彼はただ数心理的分析を行う。むしろ、それは、彼が行なうのが得なかったのだ。そうすることによつて、彼は、自分の怒りや呪いを、吐きながら逃げることができたのである。つまり、彼は、シュペルハルツから受け継がれた様々な観念を批判する。彼は、自分自身に、蔵に書いている。

この言葉がつつきぎに静かに水の上に置かれ、理想は反撃されるのではない。

流すのは、「聖者」が凍える。厚い氷の下で、「英雄」が凍える。おしまいに「信仰」、いわゆる「信頼」が凍える。に恵みも、冷たく、凍りついた。それまでに、自分を取っていかなかったのである。彼は、自分自身を蔵に書いている。
生活でも、どんな都合の悪い条件で、病気でも貧困でも——例のくだらない「自己表現」よりか、すべてわたったるはましいに想到了つ
の自己喪失には、わたったる最初は無知から、若さからそこでおこったのだ。
そこで引かれていたのだ。
病気と絶望の日々が——最も苦しく、つらい日々が、この自己喪失から、「自分への復帰をもたらしたのである。彼は、ここでの本来の自己を手にしたのである。即ち、ヴァーグナーの哲学を捨て、彼自身の本来的な哲学をつくりあげたのである。病気から回復し、行手に、わざわざから海をしっかりとふしみめたの

ニーチェは、病気と絶望の日々を通じて、ベンヌスの哲学を棄却した。
彼は、結局、ヴァーグナーの音楽は、これからアプラナスを求めに、阿片のような効果を与える音楽である、ベンヌスの哲学は、衰弱し、疲労した人間の休息を求めるような音楽であった。生きようとする努力を否定するベンヌスの哲学に、アプラナスののを見る音楽を見いだ
的体験をもってもよいであろう。彼は、この体験によって、本来の自己に目覚めた。（ニーチェの最大の体験である。）

ニーチェは、自分の生命の最小限の状態を、自分の生体の体験と言えてよいであろう、彼は、この体験をもってもよいであろう。彼は、この体験にいい、本来の自己に目覚めた。そして彼は、彼本来の思春期に到達したのである。

子供が無常である、忘却であり、新しいはじまりであり、遊戯であり、子供から回転する車輪であり、第一の運動であり、神聖に肯定である。

そうした創造は、兄弟へ、神聖な肯定を必要とする。精神は子供からの意志を意味する。「世界を失ったものは、子供からの世界を獲得する。」

永劫回帰と瞬間
この子供のような無邪気さを獲得することこそ、ニーチェの後期思想の願望であろう。「トランスシトラ」は、このような背景の下に書かれたものである。

トランスシトラは、トランスシトラの「超人」の演説が始まっている。三十才で故郷を離れ、山に入ったトランスシトラは、

「わたしたちは超人を教育する。人間は超人になるべきである。超人こそ大地の意義である」という。

超人は大地の意義である。きみたちは何もをしなかったか。

そこで生命をけさつとするもの、死滅しても、みずから毒されたものである。世に大地はここの人間に疲れている。それは、彼等を

しており、彼等を

そこで言っている「超地上の希望」は、超人を「天国」、彼岸を「不死、或いはそれに類した諸々の概念である。こう言う概念をもちだ

それは、もしや生きようという意欲を失った人々の作りあげた幻想だからである。
「超人」というのは、そういった「超地上的希望」ではなく、地上的的な希望である。なるほど、「超人」という概念には、現実の人間に対する大なる軽蔑の念が含まれている。現実に存在するどんな人間もあまりにも卑しく、あまりにも小さいという苦い認識が、「人間は克服されるべきあるもの」という概念を含んでいる。しかし、「超人」というのは、あくまで地上的的な概念なのである。それは、例えば、「神」という概念は、神を拝命として生を受け、キリスト教的霊気の最も濃密な場所で、幼年期に送っている。

周知のように、ニーチェは、ルター派の教会の牧師の長男として生を受け、キリスト教的霊気の最も濃密な場所で、幼年期に送っている。ニーチェは、何故神を否定したのだろうか。そのような言葉が、黙って見逃されるような時代背景や、ニーチェの生い立ちを考えてみれば、如何に驚異的なものであるかが理解できるだろう。

なお、「超人」という概念は、現実の人間に対する大なる軽蔑の念が含まれている。現実に存在するどんな人間もあまりにも卑しく、あまりにも小さいという苦い認識が、「人間は克服されるべきあるもの」という概念を含んでいる。しかし、「超人」というのは、あくまで地上的的な概念なのである。それは、例えば、「神」という概念は、神を拝命として生を受け、キリスト教的霊気の最も濃密な場所で、幼年期に送っている。ニーチェは、何故神を否定したのだろうか。そのような言葉が、黙って見逃されるような時代背景や、ニーチェの生い立ちを考えてみれば、如何に驚異的なものであるかが理解できるだろう。

恐らく、「神」という概念は、次のように論じられる。「お前たちが神を殺したのだ。罰を受けるべき時だ。」と神を殺したのだろう。お前たちが神を殺したのだから。「したがって、神を殺したのだから、「神を殺」という概念は、次のように論じられる。「お前たちが神を殺したのだから。「神を殺」という概念は、次のように論じられる。「お前たちが神を殺したのだから。'
<s>彼の同情は霊覚を知らぬかった。彼はわたしたの最善をなさないのになにまでも作りこんだ。このもつれも好奇心の強い者、あまりにも押しつけがましい者、あたかもに囲まれた。この反省を常に行っていた。このような目撃者にわたるの心をたためながくんだ。——なぜならば、自分が生きていく気がしなくなったのだ。

彼はわざと常に行っていた。この反省を常に行っていた。このような目撃者にわたるの心をたためながくんだ。——なぜならば、自分が生きていく気がしなくなったのだ。

彼女はどこでどこかで仰在していた。本当に本当なのか？</s>
愛を、人間の最も重要な道として奨励する。ジャン・パブロ・エスキノの足で歩くことである。踊ることではなさされるようである。何故か？

**ニーチェ** は、周知のように、同情の克服を彼の最も重要な形態の道としていた。西洋文明の中核をするキリスト教の道は、同情を、隣人、**ニーチェ**に好れば、我々がまず第一にしたけれどなければならないうちは、自分を愛し、自分を確立することである。しっかりと自分自身のことを考えておればよいのか、という風に彼は言うからである。同情する人に同情せよ、と。

しかし、同情することは、何であろうか？我々は、世の中の貧しい者、弱者、苦悩する者に同情すること、で、世の中がよくなるのではろうか？**ニーチェ** は、この点について、世の常識とは別様に考える。

同情なんて厚かましい。同情は余計なおせっかいである。それと、人を最も傷ける、というのでは同情は、一見、人を助け起こすように見える。
ない。病人には、医者と薬は必要である。しかし、所謂同情が必要ではない。いや、同情などという余計な出っかいは病人にとって害悪である。

同情する人を常に他人を必要としている。そして、他人を必要としつついる間は、実は、自分自身に苦しんでいる。即も、他者への同情の中には、自己が他人に対する自己を必要と持っている。これは、決めた病気をよくする必要はない。それどころか、同情は、病気の悪くなることを望んでいる。何故ならば、病気がよくなければ、

△△△

天福に安らぎ、この世の時代を超脱して去れ！

△△△

以降の旅の軌道をゆく、

星よ、闇がお前に何かかわらがある？

△△△

世の悲惨に纏く逆らぬ Rivers!
お前は誰を愛し呼ぶか？
いつもひとを愛ししめようとするその者を。（二三）

前に出て最も人間的なことは何か？
もはや自分自身に恥じないということ。（二七四）

体得された自由の印は何か？
（参）

体得された自由の印は何か？
もはや自分自身に恥じないということ。（二七五）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）

情は、この最も大切な誘いを傷つける。ツァラツストラが、マンと彼を自分の動物としていることは、周知のことである。ツァラツストラにしたがっている。そして、幻影と誘について。（二七六）
人間の心の遠かなるもの・もっとも深いもの・星のように高いもの・その巨大な力ー これらがすべてたがいにきみたちの心の中で泡

【本編同帰と瞬間】

生きているでないか？

多くの大が割れたって、たんの不思議であろう！

世人が笑わせる力を、きまたちはきみたち自身を笑いとすることを学べ！

そして実質、どんなにたくさんのことがすなわちうまく出来たことか！

小さな完全な事実を、きみたちのまわりに置け、きみたち、より高い人間よ！

この黄金の成熟な心をいいます。完全なものは看守するこ

に、醜いもの、悲惨なもの、憐れなるものを捜し出す。そして、それらを同情するのである。

『同時に、心の悪い心をたずねたものを美と見るということを、学ぼうと思う、こうして私は、

そういえるに、私はいつかきっとひたすら一人の肯定者であろうと願うのだ！』（二七八）

この同情の克服は結局、『 คนの哲学の骨格の結党、『 連理愛』に導く。しかし、この点については、後に詳しく説くろ。
さて、話元元にもこそ「ラッサラインラ」は「空人」についての演説をおこなうが、それは両人間が、現在の状態から脱皮するには未だこの生命に対する考え方が存在する。

さて、ニューチェ、いう言われば、「人間の自体は」、精神でも理性でもなく、身体である。我々の肉体である。彼は次のようによく、

『人間は造られるべきあるものである』

このニューチェの概念は、フライトの無意識的肉体の『イド』に似ているが、この自体である肉体は、どのような存在なのであろうか？

それは、一体何を欲しているのだろう？

この問いに対してニューチェは、「はっきり次のように答えている。」それは、肉体は「自己を越えて創造することは、より大きく、より柔軟になり、より強力になり、より美しくなることを欲している。それが、生命の自体なのである。それが生ある運動体の傾向なのである。それは生命は、より大きく、より上昇する傾向をもした運動体である。ニューチェ流に言えば、生とは「力への変化」なのである。彼は言いつつあるのだろう。
その真実の姿を見れば、そこで何か吐き気を催すようなものがある。だから、我々の目標は、そのような現実の人間ではなく、それらの人々に惚れない存在である。その存在の存在は、存在の存在を囲むものでなければならず。

「超人」　　そういいうものでなければならず。

デカダンスというの、生命の基本的条件である闘いや戦争を否定する。それが求めているのは、闘いや戦争などが全くなく、平和で、何もしていなくても楽しく調和のとれた状態。そこで、モルヴァーナである。心理分析の言葉は、精神分析の発見を取までもなく、死への無関心である。

善人がどんな悲観をしても、善人の悲観こそもっとも有害な悲観なのだ。

人間では、人間に対する友情を主張する。それは次のようにいう。

「人類は、人類愛に対して友情を主張する。」

私たちは、自分を光り輝かせることに教える。人間が私たちは、進む方向をたっても、お互いにお互いを同志と認めることが必要である。彼の所謂「星の友情」。

ただ、友情とは、自己を光り輝かせることに教える。人間が私たちは、進む方向をたっても、お互いにお互いを同志と認めることが必要である。彼の所謂「星の友情」。

「人類愛は、人類愛に対して友情を主張する。」

私たちは、自分を光り輝かせることに教える。人間が私たちは、進む方向をたっても、お互いにお互いを同志と認めることが必要である。彼の所謂「星の友情」。

「人類愛は、人類愛に対して友情を主張する。」

私たちは、自分を光り輝かせることに教える。人間が私たちは、進む方向をたっても、お互いにお互いを同志と認めることが必要である。彼の所謂「星の友情」。

「人類愛は、人類愛に対して友情を主張する。」

私たちは、自分を光り輝かせることに教える。人間が私たちは、進む方向をたっても、お互いにお互いを同志と認めることが必要である。彼の所謂「星の友情」。

「人類愛は、人類愛に対して友情を主張する。」

私たちは、自分を光り輝かせることに教える。人間が私たちは、進む方向をたっても、お互いにお互いを同志と認めることが必要である。彼の所謂「星の友情」。

「人類愛は、人類愛に対して友情を主張する。」

私たちは、自分を光り輝かせることに教える。人間が私たちは、進む方向をたっても、お互いにお互いを同志と認めることが必要である。彼の所謂「星の友情」。
生命の哲学——力への意志の哲学――超人への哲学であった、と言

「あるいは、この超人への道という構想に最大の障害が現われる。それは、永劫回帰の思想である。同じことが何度も何度も繰り返し回帰する

同じ事象が何度も何度も繰り返し回帰する」と考えである。この永劫回帰という考えは、ニーチェの最も極端な形式である。

同じ状態が何度も繰り返し回帰してくるから、そこに進歩も向上も存在しないと考える。だ扱い直面している「瞬間」が、永遠のものとして回帰してしまうだけである。

ツアラストは、最初、永劫回帰の思想に思いをはせた時、自身の海を感じた。彼は、永劫回帰の思想に、吐き気を感じたのである。

初めは行い、一切ほどのことを、存在の運動は永遠に回転する。一切は死んで、一切はふたたび花を咲かせる。存在の年は永遠にめぐ

あらゆる切片に存在はいま、すべてのここに在るかしら、球が回転する。一切は別れ、一切はふたたび接続する。存在の輪は、永遠にお

生きるということになれば、あのあきらかさした小さい人間が、また戻ってくる。彼等は決して忘れることはない。彼等は、永遠に戻ってくる。そ
現在の世界における人間の中の最高の者、その者で、ニーチェに言われば、あまりにも、あまりにも小さい。その実体を知れば、顔をそ
むけ、吐き気をもよおすほどの卑小さである。こう言っていた間に、ニーチェは、ヴァージナーのことを考えていたのに違いない。我々には、
それは何の存在であるのか、これもすべての人間を越えるような存在、あの人間への夢はどうなるのか？

ツララスストラは、この実然回帰の思想を思い至った時、七日間も、倒れて、吐き気に襲われていたのだ。ところが、その彼も、生命の極
限状態経て、ようやく病気から回復するに至るのである。

もうそれ以上語るなら、あなたは快方に向かっている！

そうツララストラは彼に答えた。

世界が花園のようになられたを待っている。パラソロピアをハトの群れのものへ出て行け！とりわけ、しかし、歌う鳥たちのところへ行け！あなたが鳥たちから歌うことを使

ピトするために！

というは、彼は快方に向かっている人々のためのものだからだ。健康な者たちの言うのも足となる。そして、健康な者が歌を欲し

このワソトヒドリの忠告に対してツララストラは、次のように答えた。
生まれたとは何か。

生活とは何か。

彼の言葉の真実である。

彼は、本当に生きているか。

生活とは何か。

彼の言葉の真実である。

彼の言葉の真実である。

彼は、本当に生きているか。

生活とは何か。

彼の言葉の真実である。

彼の言葉の真実である。

彼は、本当に生きているか。

生活とは何か。

彼の言葉の真実である。

彼の言葉の真実である。

彼は、本当に生きているか。

生活とは何か。

彼の言葉の真実である。

彼の言葉の真実である。

彼は、本当に生きているか。

生活とは何か。

彼の言葉の真実である。

彼の言葉の真実である。

彼は、本当に生きているか。
このことは、我々の過去を救済するのである。このことは、どうして可能か？
それならば、我々は過去の自分を克服すべきものと考えるに迫って、人間を超人への道、超人への橋として構想することによって可能なのである。

永劫に帰るという事は、生成が存在することである。我々は、生前の道に到る「過去」にいるのだろう。「永劫に帰る」と「過去」を救うことが出来るのである。「過去」を救うことが出来る。何故、我々に生きる勇気をあたえる歌声になるだろう。

「永劫に帰る」ということは、生前の道に到る「過去」にいるのだろう。「永劫に帰る」と「過去」を救うことが出来るのである。「過去」を救うことが出来る。何故、我々に生きる勇気をあたえる歌声になるだろう。

永劫に帰るという事は、生成が存在することである。我々は、生前の道に到る「過去」にいるのだろう。「永劫に帰る」と「過去」を救うことが出来るのである。「過去」を救うことが出来る。何故、我々に生きる勇気をあたえる歌声になるだろう。

永劫に帰るという事は、生成が存在することである。我々は、生前の道に到る「過去」にいるのだろう。「永劫に帰る」と「過去」を救うことが出来るのである。「過去」を救うことが出来る。何故、我々に生きる勇気をあたえる歌声になるだろう。

永劫に帰るという事は、生成が存在することである。我々は、生前の道に到る「過去」にいるのだろう。「永劫に帰る」と「過去」を救うことが出来るのである。「過去」を救うことが出来る。何故、我々に生きる勇気をあたえる歌声になるだろう。
おお、人間よ！気をつけよ！

二つ！

深い夜中は何を語るか？

三つ！

「わたしたちは眠った、わたしたちは眠った」。

四つ！

深い夢からわたしたちは目覚めた。

五つ！

世界は深く、

六つ！

世界の深い、

七つ！

昼が思っているより深く。

八つ！

快楽は心のたどりより深く。

九つ！

嘆きはいう、「おろびけがけ」。

十つ！

しかしすべての快楽は永遠を欲する。

十一！
瞬間というのは、ただに消えてしてしまう。そして、また新しい瞬間が誕生する。この生まれてすぐ消えていく瞬間が永遠なのである。それ
すなわち、瞬間を永遠に戻ってくるということは、その瞬間の中に、過去も、現在も、未来もすべて含まれているということである。その過去が未来を含んでいることである。つまり、我々
が、未来を含んでいるということになるだろう。瞬間を単に過去をも意味しているわけではない。瞬間を存在として永遠に欲することができるのは、この瞬間を生きること、歌うこと、喜ぶこと、肯定的な意味があるからである。瞬間を存在として永遠に欲することができるのは、この瞬間を生きること、歌うこと、喜ぶこと、肯定的な意味があるからである。

瞬間は、それ自体のために存在している。それは、何かの目的のために存在するのではない。そうではないで、この瞬間こそが
目的なのである。この瞬間は、瞬間を手段としてではなく、目的として救い出すこと、それが永遠回帰を肯定する思想である。で
こと、我々は、精神の三つの変化の“峠”を思い出して
瞬間は、いつも無邪気に遊んでいる。彼にとっては、瞬間は目的そのものである。この瞬間は、何かのために存在するのではない。それは、ただ、無邪気に遊んでいるだけである。それ以外に、瞬間は彼にとって意味
をもたない。彼は、何事でもよい。それを“やりたいからしている”のと同じである。そして、彼にとっては、それ以外に人生の目的的なものは、存在しない。遊ぶこと、無邪気に世界をわたれること、何も考えないで瞬間に没入すること、それこそが、彼にとって生きる意味である。
人生は、次のように語っている。あらゆる物は永遠の泉において、善悪の彼岸にあって洗われる。善と悪とは中間の影、美しい悲劇、行い、ことにすぎない。

まことに、無目的に、これこそ空、無目的という空、無目的という空。

人生に、はっきり決まった目的が存在しない。

『無目的に』これこそ世界のものとも古い命題である。これをわたしてあらゆる物に取りかえてしまい、あらゆる物を、目的に支配させ瞬間を過すか～にかかっている。

何度もうか、瞬間を重ねていけば、ゴールに達するのではない。そういうような考えは、瞬間を手段として扱っている。

人生は、遊びである。ヘテヘテは神々のトランブルである。

私は、自己を無限に乗り越えること、絶対なる自己克服～即ち、超人への道を目指すことだけだろう。すなわち何であってもよい。問題ののは、我々に与えられた瞬間をどのように過ごすか～如何に自己を燃焼させるか～にかかっている。

友よ、きまちたは、趣味について争うべきではない。というのか。だが、おとぎ生きることは、趣味と貧乏さのための闘いである。それは書いていない。

趣味は、同時に分銅であり、はかりりであり、はかる人である。おとぎ生きとし生けるもので、分銅と、はかりざるを、はかる人を。

人が遊びである。が、それは、必然的に闘いをともなる。自分を流儀、自分のやり方で生きようとするならば、どうしてもそこには何かの
障害や挑戦に出会わず、得心しながらある。まず、第に、社会的通念。道徳と障害があるだろう。「ルールは、道徳こそ我々の生を重くする重圧であるということ。この道徳の重さから脱して、軽くなることが必要である。

現存する道徳は、軽い人間である。彼は、笑いつつ真剣なことを説く。

舞踏者アラブラストは、軽い人間である。彼が、笑いつつ真剣なことを説く。

この道徳の重さから脱して、軽くなることが必要である。

我々は、自分に感動されない。笑えずに軽い者になるだろう。

世の所謂善悪の観念など、一体何であろうか？何が善で、何か悪であるかは、本当のところ誰も分からない。

軟弱な性格に、ぶつかる者たち。わたしたち自身は、努力することは、全然の絶対の喜びだからである。

我々は、幾多の苦難を乗り越え、成長し得るのみである。

軽くなってしまって、生きていることの素晴らしさを歌おうではないか！
が、自ら進んで何をやろうとする時、真剣に取り組む努力をしない人はならない。"

それに、『天にもとどく喜びの叫び』をあえて言う所望む者は、「おそらくそうしたもののだ」。 thereafter, "天にもとどく喜びの叫び" をあえて言う所望む者は、「おそらくそうしたもののだ」。
《豪人に対する恐怖》という言葉が使われている。豪人達に対する恐怖と配慮を優先することによって、人は自分自身を見失ってしまって、自分が出来ることは、その時、我々は「これが人生なのか」と思って」一人で、やっているのである。その時、我々は「これが人生なのか」と思って」一人で、やっているのである。彼は言っている。「だって、わたしたちは、自分たちの考えは、死を乗り越える心を育まず。それが、人生であるのか。もし、もう一度！という言葉は、永劫同帰を肯定したときに発せられる言葉である。勇気、この言葉を言わせた、ニーチェは書いていている。「死を乗り越える心を育まず。それが、人生であるのか。もし、もう一度！」という言葉は、永劫同帰を肯定したときに発せられる言葉である。勇気、この言葉を言わせた、ニーチェは書いていている。「死を乗り越える心を育まず。それが、人生であるのか。もし、もう一度！」という言葉は、永劫同帰を肯定したときに発せられる言葉である。勇気、この言葉を言わせた、ニーチェは書いていている。
水戸亀岡と瞬間

わたしの叫びがすすまったように、羊飢いはかんだ。
したたかにかんだ！ヘビの頭を遠くに吐き出す。
それにぴあがった

「もはや羊飢いでも人間でもなく」

変化した者が、光にとりかこまれた者、彼は笑った！
彼が笑ったように、ひとりの人間が笑った

この喉のおこんだヘビをかみ切るのが、勇気である。

だから、死というものは、生あるものに何時かはやってくる。ただ、人間だけが、それが確実にやってくるということを知っているだけである。

生まれて、人間の実存の条件が存在する。即ち、我々は、自己の将来の確実な死を知っているが故に、その死を意味付けようとする。つまり、死は、我々にとって、二重の意味を持っている。あくも書いたように、我々が、生きたくなければ、死ねばいいのである。ところが、こうして、懸命に生きようとする人にも、死は刻一刻と、確実に近づいてくる。数学的な確実性をもって近づいてくるのだ。この近づいてくる死をどのように受けとればよいのだろうか？

死に、ある意味で人間のあらゆる行為をはるかにかえしめるものだといえる。つまり、死は、我々人間のあらゆる人間関係を一切無関心である。死は死の自承として自己に何ら合当させるを得ない。死は死を自承として、人間的関係を一切無関心である。人間関係が、どうなるにせよ、消え去り、無化されていこう。

変化した者が、光にとりかこまれた者、彼は笑った！

能夠が、ひとりの人間が笑った

「もはや羊飢いでも人間でもなく」

変化した者が、光にとりかこまれた者、彼は笑った！
彼が笑ったように、ひとりの人間が笑った

この喉のおこんだヘビをかみ切るのが、勇気である。

だから、死というものは、生あるものに何時かはやってくる。ただ、人間だけが、それが確実にやってくるということを知っているだけである。

生まれて、人間の実存の条件が存在する。即ち、我々は、自己の将来の確実な死を知っているが故に、その死を意味付けようとする。つまり、死は、我々にとって、二重の意味を持っている。あくも書いたように、我々が、生きたくなければ、死ねばいいのである。ところが、こうして、懸命に生きようとする人にも、死は刻一刻と、確実に近づいてくる。数学的な確実性をもって近づいてくるのだ。この近づいてくる死をどのように受けとければよいのだろうか？

死に、ある意味で人間のあらゆる行為をはるかにかえしめるものだといえる。つまり、死は、我々人間のあらゆる人間関係を一切無関心である。人間関係が、どうなるにせよ、消え去り、無化されている。
その我々が、自然なあり方、本来のあり方に戻ったとすると、我々はこの「死」を忘れてしまうだろう。

ミーマント・モリ（Memento mori）死を忘れること。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。我々は、死を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘れてしまう。「死」を忘れてしまう。

我々は生きるという神聖な時間、死を忘
さて、以上に我々は、ニーチェの「ファラフスタナー」における中心的思考を考察してきたわけであるが、振り返って考えてみると、ニーチェの思想は、彼の処女作「悲劇の誕生」で、ほぼ彼の性格が出来上がっていっていたと言っている。ただ、ニーチェ自身が、自分自身の思考をシュペルハルツの思想と結びつけて考えていた。しかし、結局、両者の考えは根本的なところでは異なっていた。ニーチェの生涯は、その違いに次第に気付き、遂には彼独自の哲学に目覚めるという過程であったと見えるだろう。

さて、その「悲劇の誕生」において、ニーチェは、彼の特に特異な概念の一つを導入した。ニーチェは、異常な音楽の要素と音楽の要素の二つから出来ているが、悲劇は、その発生から言うと、劇の背後で歌われている合唱隊の歌声（コレッソ）から作られた。そして、その歌声は、春の訪れと共に繰り返される狂気狂舞の祭典にその根拠を持っているのである。

音楽は、この自然や生命を動かしている根源の者の二つを合体するところに生まれるものである。音楽は、この自然や生命を動かしている根源の者と合体するところにあるものである。音楽は、この自然や生命を動かしている根源の者と合体するところに生まれるものである。

そして、ニーチェは、異常な音楽の要素を母胎にしていないのである。我々は、この音楽を聞き、またこの音楽を母胎として生まれた悲哀、我を忘れて歌い上げる生の葬歌が、音楽の起源なのである。音楽は、この自然や生命を動かしている根源の者の二つを合体するところに生まれるものである。音楽は、この自然や生命を動かしている根源の者の二つを合体するところに生まれるものである。音楽は、この自然や生命を動かしている根源の者の二つを合体するところに生まれるのである。
何に対しわれわれは感謝すべきか。ひとりの私の所が何である、何を体験し、何を欲しているかをここぼくの楽しみをもって見

を表し、人類をもってその目と耳とを、はじめてひとびとに与えられたのは、芸術家そのものに特に芸術家であった。考え酴記して、われわれ

に、われわれをもってこれから日常のひとびととに与えられたのは、芸術家そのものに特に芸術家の見えないの中に隠されている主人公の尊厳すべきを教えられた。彼らがはじめて、われわれ

が主人公としての自分自身を遠方に考え、いわば単純化した明るく高められたが、かたにて、眺められようになるかという術を教え

くれた、つまり自分自身の見物するところで自分を「舞台上にさせる」ところの術を考へてみよう。

ではこの低劣な術を観視することができる。

このいうときは、それは、われわれがこの世界を弱めるものである。即ち、芸術であり、スポーツであり、闘いであり、競技

科学的世界観を重ねて弱めるものである。即ち、科学の世界観を重ねて弱めるものです。これを我々の考え方に見なされよう。

科学の世界観なども一緒にされれば、同様に、われわれの世界観を弱めるものと見なされるべき。

我々は、この考え方を提供してきたのは、哲学、宗教、道徳、習慣、科学、芸術などである。これらによって提供された術式に自己の体験を嗜みあ

われ、我々は自分の世界観を作っているのだ。
哲学者も、音楽家も、文学家も、スポーツもすべて、我々に感動を与えるものの中にドラマが存在する。ドラマとは何か？それは、我々に人生の箇所が単純化された形で表現されていると言うことである。問題が何であるか、それは様々なあるものであり、我々自身の生活に現われていることが。だから、ドラマがある。このようなリアリティ、不安、無事な感動を提供するための努力と私が常においにしているヒーローを目指す我々が、より誰もが存在する数々のドラマを解釈するものである。それは、我々は、感動を覚え、救われること。このことを理解すれば、我々は、人生の至る所にドラマを見いだすことができるだろう。芸術は、これらのドラマを最も私たちの易し形で我々に提供してくれ、その意味で我々は人生を教えてくれるものである。
第1章
「エリアックス」から語りきりの第2部「死ぬことと書くことについて」

第2章
「エリアックス」の第2部の「三つのか变化について」

第3章
「エリアックス」の第3部の「三つの変化について」

87654321
第四章
「ゥゥゥゥゥゥストラ」の第四節の「より良い人間について」の17
「復活した知識」の「たおれたばかり見通し」の63の「星のモラル」

第5章
「ゥゥゥゥゥゥストラ」の第三節の「第二の「快方に向かう人」」的1
「第二の「快方に向かう人」」の第四節の「にとって」
「第二の「快方に向かう人」」の第五節の「について」

第6章
「ゥゥゥゥゥゥストラ」の第二節の「第四節の「体の関係について」
「第四節の「体の関係について」」の二節の「について」
「第四節の「体の関係について」」の三節の「について」
「第四節の「体の関係について」」の四節の「について」

注5に同じ
注5に同じ
注5に同じ
注5に同じ